

特集 2

ラグビーワールドカップ2019 日本大会の軌跡とレガシー

第1節 総論

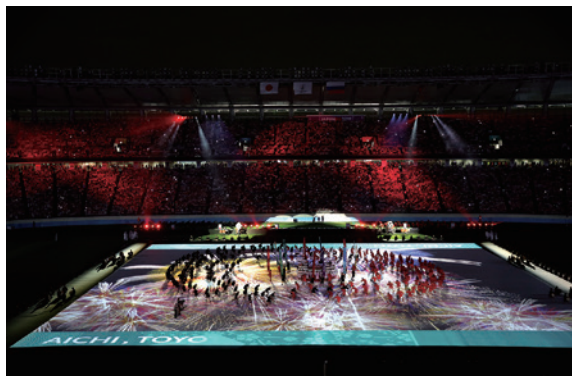
2019（令和元）年9月から11月にかけて、日本全国12会場でラグビーワールドカップ2019日本大会（以下、「RWC2019日本大会」という。）が開催されました。大会での日本代表の活躍は日本中に多くの感動をもたらし、RWC2019日本大会の成功は社会に大きなインパクトを与えました。また、日本はアジアかつラグビー伝統国以外で初めての開催地としてアジア圏を含む世界中から大きな注目を集めました。

大会は、日本代表の活躍はもとよりラグビーワールドカップ2019組織委員会（以下、RWC組織委員会という。）や開催都市等の多大な努力によって円滑な大会運営が行われ、成功裏に閉幕しました。チケット販売や観客動員も好調で、チケットの販売数は、最終的な販売可能席約185万3,000枚のうち約184万枚となり、販売率は約99.3%（中止となったプール戦3試合を含む）に達し、観客動員数は延べ170万4,443人、1試合平均観客数は37,877人でした（ともに中止となったプール戦3試合を除く）。各開催都市に開設された全国16か所のファンゾーンには、国内外から多くの人々が訪れ、大会期間中、全会場合計の来場者数は113万7,288人でした。ファンゾーンでの交流は、単に試合を観戦するだけでなく、国内外のファン同士を結び付ける大きなきっかけとなりました。なお、チケットの販売率やファンゾーンの入場者数は、これまで開催されたラグビーワールドカップの中で最高記録となっています。

本特集では、まずRWC2019日本大会の概要や結果をまとめ、アジア初のベスト8進出を果たした日本代表の活躍を振り返ります。そして、文部科学省として行った大会成功に向けた機運醸成を図るための取組や地方自治体の取組、大会のレガシーとして今後進めていくラグビー普及に向けた取組等について紹介します。



秋篠宮皇嗣殿下による開会宣言



オープニングセレモニー

第2節 大会の開催について

ラグビーワールドカップは、4年に1度開催される15人制ラグビーの世界王者決定戦で、オリンピック・パラリンピック競技大会、FIFAワールドカップ（サッカー）とともに世界三大スポーツ大会と呼ばれています。第1回大会は1987（昭和62）年にニュージーランドとオーストラリアの共催で開催されました。以後、イングランドやウェールズなどのラグビー伝統国で開催され、今回で第9回となりました。回を重ねるごとに大会の規模が拡大し、世界中の注目を集めています。日本代表は第1回大会から第8回大会まで全て出場していますが、決勝トーナメントへ進出したことはなく、全て予選敗退となっていました。

大会の開幕戦が行われた9月20日は、試合前にオープニングセレモニーが執り行われました。オープニングセレモニーでは、大会マスコットのモデルにもなっている歌舞伎の連獅子のパフォーマンスや富士山になぞらえたスクリーンにこれまでの大会の映像が映し出されるなどの演出がなされました。また、本大会の名誉総裁である秋篠宮皇嗣殿下は、「この大会を一つの契機として、ラグビーフットボールが更に発展していくとともに、スポーツを通じた交流が、世界の人々の友情と親交を深めていくことを心から願い」、開会を宣言されました。

1 開催期間

2019（令和元）年9月20日（金）～11月2日（土）

2 参加チーム

20チーム（5チーム×4プール）

前回大会成績によって出場権を獲得したチーム：12チーム

予選によって出場権を獲得したチーム：8チーム

3 試合形式

全48試合

プール戦（プール内総当たり戦）：40試合

決勝トーナメント 準々決勝・準決勝・3位決定戦・決勝：8試合

4 試合会場（開催都市）

札幌ドーム（札幌市）

釜石鶴住居復興スタジアム（岩手県・釜石市）

熊谷ラグビー場（埼玉県・熊谷市）

東京スタジアム（東京都）

横浜国際総合競技場（神奈川県・横浜市）

小笠山総合運動公園エコパスタジアム（静岡県）

豊田スタジアム（愛知県・豊田市）

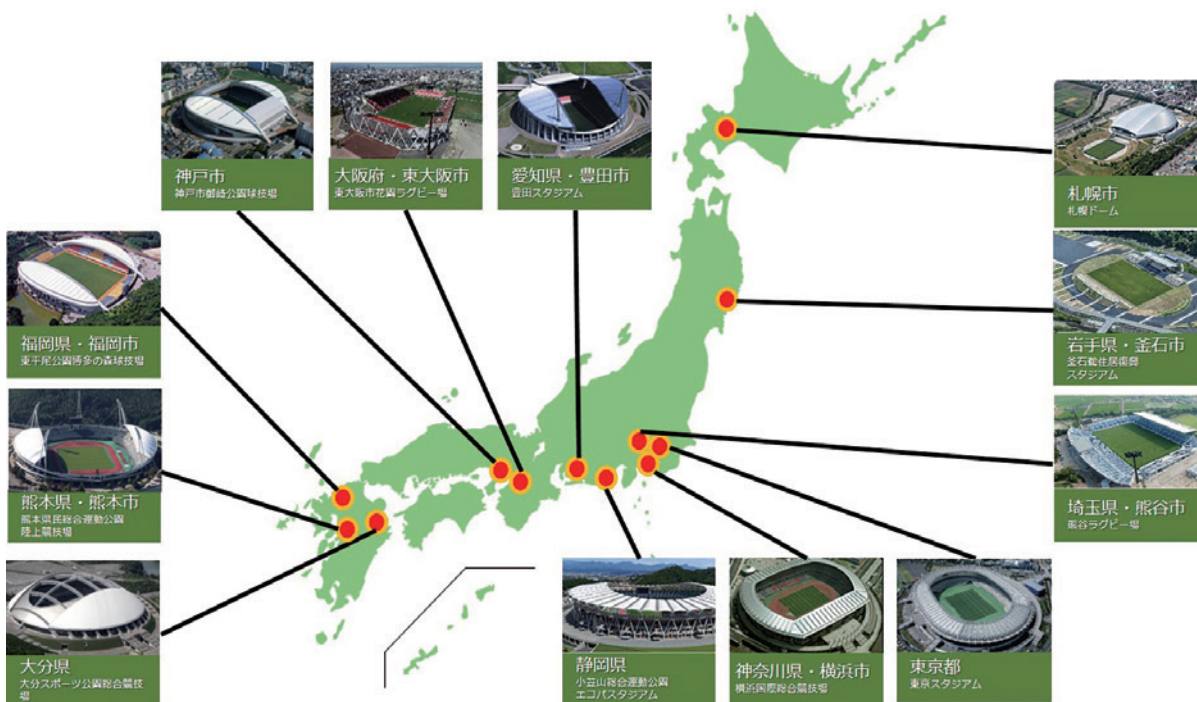
東大阪市花園ラグビー場（大阪府・東大阪市）

神戸市御崎公園球技場（神戸市）

東平尾公園博多の森球技場（福岡県・福岡市）

熊本県民総合運動公園陸上競技場（熊本県・熊本市）

大分スポーツ公園総合競技場（大分県）



試合会場（開催都市）がわかる分布図

5 大会結果

(1) 日本代表の試合結果

予選プールA

- 第1戦 ○日本 30 - 10 ●ロシア
- 第2戦 ○日本 19 - 12 ●アイルランド
- 第3戦 ○日本 38 - 19 ●サモア
- 第4戦 ○日本 28 - 21 ●スコットランド

決勝トーナメント

準々決勝 ●日本 3 - 26 ○南アフリカ

※準々決勝敗退（ベスト8）

(2) 大会全体の結果

① プールA 順位表

順位	チーム	試合	勝	分	負	トライ数	得点	失点	得失点	ボーナス ポイント	勝ち点
1	日本	4	4	0	0	13	115	62	+53	3	19
2	アイルランド	4	3	0	1	18	121	27	+94	4	16
3	スコットランド	4	2	0	2	16	119	55	+64	3	11
4	サモア	4	1	0	3	8	58	128	-70	1	5
5	ロシア	4	0	0	4	1	19	160	-141	0	0



ニュージーランド代表のハカ



ウェールズ代表のトライ



ニュージーランド代表のラン



表彰式の様子（3位決定戦）



イングランド代表のタックル



南アフリカ代表のラン



イングランド代表のラン



表彰式の様子（決勝戦）



優勝した南アフリカチーム

6 令和元年東日本台風への対応

大会期間中に日本を直撃した令和元年東日本台風の影響でプール戦3試合が中止となってしまいましたが、RWC組織委員会や開催都市等の迅速かつ的確な対応により、日本対スコットランド戦が催行されるなど、大きな混乱もなく大会が進行されました。これに対し大会の主催者であるワールドラグビーのビル・ボーモント会長が、「台風ハギビスという非常に困難な災害に対する日本の対応は、この素晴らしい国の人々の回復力と復興への決意の表れであると感じます。」と述べるなど各方面から多くの称賛の声が上がりました。

7 大会を支えたボランティアの活躍

RWC2019日本大会が成功した要因の一つとして、ボランティアの活躍が挙げられます。ボランティアとして採用された約1万3,000人は、国内外から各会場に訪れたファンを案内し楽しませる重要な役割を担う会場内観客サービス、ゲストの受付や案内を担うVIP対応、国内外のメディアや放送局の活動を補助するメディアサポート、開催都市の街なかや空港、駅、ファンゾーン等においてファンを案内し楽しませる重要な役割を担う街なか&ファンゾーンガイドとしても活動し、日本のおもてなしを届けました。



ミーティングをしている様子



ミーティングをしている様子



ファンをサポートしている様子



ファンとハイタッチしている様子

第3節 日本代表の活躍

日本代表は、予選プールを全勝で勝ち抜き、史上初の決勝トーナメントに進出しました。準々決勝では残念ながら大会優勝チームとなった南アフリカに敗れてしまいましたが、日本代表は全試合で熱戦を繰り広げ、日本中が熱気に包まれるとともに、ノーサイドとなるまで全力で戦う姿は国民に夢や感動を与えるものとなりました。この感動は、ラグビー自体がもつ魅力に加え、ラグビーの代表チーム特有である様々なバックグラウンドや民族といった多国籍の選手から構成される集団が、それぞれの選手の個性を活かしつつONE TEAMとして活躍したことも大きな要素となっています。

本節では、大会を通じた日本代表の活躍を振り返ります。

1 予選プール 第1戦 日本 - ロシア



試合前のセレモニーの様子



運動量豊富なピーター・ラブスカフニ選手



大会を通じて活躍した松島幸太郎選手



日本の勝利に歓声を上げるファン

2 予選プール 第2戦 日本 - アイルランド



ピッチに入場する両チームの選手



長年、代表を支えている田中史朗選手



相手の突破を阻止する日本選手



試合に勝利し喜ぶ日本チーム

3 予選プール 第3戦 日本 - サモア



相手に抑えられるも前進を試みるレメキロモノラヴァ選手



力強い突破をみせるヴァルアサエリ愛選手

4 予選プール 第4戦 日本 - スコットランド



豊富な運動量で活躍した稲垣啓太選手



大会の盛り上げ役となった観客

5 決勝トーナメント 準々決勝 日本 - 南アフリカ



キャプテンとしてチームを支えたリーチマイケル選手



タックルを突破する具智元選手ほか



南アフリカ代表にトライを許す



試合後の集合写真

RWC2019日本大会の成功によって、国内でもラグビー競技への関心が高まっています。しかし、大会招致の段階では、日本でのラグビー競技に対する認知度と普及度はまだ低い状況でした。そこで、文部科学省では、平成26年からラグビーワールドカップの成功に向け、「2019年ラグビーワールドカップ普及啓発事業」を実施し、委託先である公益財団法人日本ラグビーフットボール協会（以下、「JRFU」という。）と連携して「放課後ラグビーによる競技者の拡大」「タグラグビーによる競技の普及」「ラグビーを通じた国際交流」の3本柱で普及・啓発活動を行ってきました。

また、トロフィーツアーの中の一つとして「こども霞が関デー」でトロフィーの一般公開を実施するとともに、公益財団法人日本アンチ・ドーピング機構（以下、「JADA」という。）と連携し、ドーピング防止活動の推進を図りました。

さらに、スポーツ庁が官民連携のもとで実施する「Sport for Tomorrow」の枠組みの中でアジア各国へのラグビーの指導者の派遣や講演会等を実施してきました。

本節では、上記の文部科学省・スポーツ庁の取組に加え、公認チームキャンプ地として各代表チームを受け入れた地方自治体の取組についても紹介します。

1 国内への普及・啓発

(1) 放課後ラグビープログラム

チーム活動を行わない平日のラグビー教室として、トップリーグのチーム、都道府県ラグビー協会、大学のラグビー部、NPO団体などが主体となり、平成26年度よりRWC2019日本大会開催都市や公認チームキャンプ地がある都道府県の小学5・6年生～中学3年生を対象に、各地それぞれ10回程度のカリキュラムを実施しました。これは、ラグビー部がある中学校の数は少ないことから、小学生まで地域のクラブで活動してきた子供たちが中学生年代でもラグビーを続けられる環境を作るため、部活動ではない新しい学外クラブの創設により、中学生年代の空洞化を改善することを目的として実施した事業です。プログラムの内容は、ラグビーの楽しさ、面白さ、爽快さ等にスポットを当てた基礎的なトレーニングを実施したものが多く、参加者に対するアンケートでは「早くラグビーがしたい」「基本的なことかつ大事なことを教えてもらった」といった声が寄せられ、満足度の高いプログラムとなりました。

平日もラグビーのできる環境のさらなる創設に向け、JRFUのホームページにおいては全国各地で取り組まれている類似の活動を紹介しています。また、地方自治体や地域のラグビー協会等が主体的に計画する「自主運営クラス」作りに活用できるよう、放課後ラグビープログラムの開催を通じて蓄積されたノウハウや実施手順等を取りまとめた運営マニュアルも作成するなど、引き続き、ラグビーのできる環境づくりに向けた取組が行われています。



トレーニング中の様子



ミーティング中の様子

(2) タグラグビーによる競技の普及

タグラグビーとは、タックルの代わりに腰につけた2本の「タグ」（ひも状のもの）を取ることで、激しい接触をなくしたラグビーとして、全国の小・中学生年代へラグビー競技の普及・拡大を後押しするためのスポーツです。タグラグビーは「運動が苦手でも楽しめる」「安全」「豊富な運動量」「学年や性別を問わない」という特長があり、体育の授業への取り入れやすさから、小・中学校学習指導要領にも記載されています。

平成24年度には、タグラグビーの魅力、タグラグビーの導入方法や楽しみ方等が掲載された「2019ラグビーワールドカップ・タグラグビーの普及啓発ガイドブック」を作成し、全国約2万2,000校の小・中学校へ配布しました。また、小学校向けの「みんなでトライ！タグラグビーガイドブック」や中学校向けの「タグラグビーを教える指導者のためのガイドブック」を作成するとともに、小・中学校教員や地域の生涯スポーツ関係者等を対象として、タグラグビーの特性や評価方法、実技指導方法を学ぶ「タグラグビーティーチャー研修会」を各地で実施し、その研修修了者にはJRFUの「タグラグビーティーチャー研修会修了証」を発行しました。学校体育現場や地域スポーツでのラグビー競技の普及促進、学校体育へのスムーズな導入の実現に向けた取組を行いました。

指導者の育成により、タグラグビーを通じて試合終了後のノーサイドの精神や友達と協力する大切さ、相手を思いやる気持ちといったラグビー界が重視してきた文化を学ぶことができるとともに、未来のラグビー選手となる小・中学生の増加につながる可能性を秘めています。



トレーニング中の様子



研修会の様子

(3) こども霞が関見学デーにおけるウェブ・エリス・カップの一般公開

ワールドラグビーは、ラグビーワールドカップ優勝チームに贈られるトロフィー「ウェブ・エリス・カップ」が巡回するトロフィーツアーを実施しました。平成29年11月のイングランドを皮切りに、約2年をかけて20の国と地域を巡回しました。今回は、マレーシアやインド、ネパール、チリといった今までトロフィーが持ち込まれたことがない国と地域も訪れました。最後の訪問先は「日本」で、各開催都市での一般展示に加え、地元のラグビースクールや大学のラグビー合宿、田んぼラグビー等にも訪れました。

令和元年8月には、「こども霞が関見学デー」（文部科学省をはじめとした府省庁等が連携して、それぞれの業務説明や省内見学などを行うもの）のプログラムの一つとして、トロフィーが一般公開されました。公開初日には記念式典が行われ、柴山昌彦前文部科学大臣、鈴木大地スポーツ庁長官の他、室伏広治ラグビーワールドカップ2019ドリームサポーター、嶋津昭RWC組織委員会事務総長が出席し、訪れた子供たちを歓迎するとともに、一緒にクイズなどを楽しみました。



こども霞が関見学デーにおける記念式典



記念式典の様子



ゲストとして訪れた大会マスコットのレンジー



広報活動の様子



広報活動の様子

(4) ドーピング防止活動に関する取組

スポーツ庁では、JADAに委託し、ファンゾーンにおいて、若い世代のアスリートや観客、ラグビーファンを対象としたドーピング防止活動の普及・啓発の一環となる「Keep Rugby Clean」キャンペーンを実施しました。キャンペーンブースでは、訪れた観客やラグビーファンが、ラグビーワールドカップを通じて感じたスポーツの魅力やスポーツの力をメッセージにして記入することで、クリーンでフェアなスポーツへの賛同・参画を行いました。



観客等がメッセージを記入している様子



観客等がメッセージを記入している様子



観客がバナーの前でポーズをとっている様子

2 ラグビーを通じた国際交流

(1) ラグビーを通じた国際交流プログラム事業

「2019年ラグビーワールドカップ普及啓発事業」の中の一つの事業として、国際交流プログラムを実施しました。ラグビーを通じた国際人の育成等を目的としている同プログラムには、過去にワールドカップで3度優勝しているニュージーランドで国際交流を行う派遣事業とRWC2019日本大会に出場する太平洋島嶼国から生徒を招へいし、ラグビーを通じた国際交流を図りながら大会主催国のレガシーの学習機会を設ける受入事業があります。

派遣事業は、英語およびラグビー技術の向上を目的とした留学プログラムで、2015（平成27）年から毎年、日本の女子高校生10名程がニュージーランドを訪問し、ニュージーランド人家庭のホームステイ先等に滞在し、文化・伝統に触れながら、国際感覚を身につけることを狙いとしています。

参加者は、ニュージーランドには街中の公園などいたるところにゴールポストが設置され、誰もが気軽にラグビーを体験できる環境に驚いたと帰国後のレポートで語っています。

帰国後はニュージーランド大使館主催の報告会での英語スピーチやジャシнда・アーダーンニュージーランド首相との面会、RWC2019日本大会への参画など幅広い活動を行いました。これらの経験は、自身の国際人としての成長とともにラグビーの将来を見据えた活動及びRWC2019日本大会のレガシープラン推進に大いに貢献してくれるものとなるでしょう。

受入事業では、RWC2019日本大会に出場した太平洋島嶼国の3か国（フィジー、サモア、トンガ）を対象として、各国から5名ずつの中学生が令和元年10月に来日し、東大阪市において様々な国際交流が行われました。

鈴木大地スポーツ庁長官との面談では長官から自身がソウルオリンピックで獲得した金メダルが披露され、本プログラムが実り多いものとなるようにとの励ましの言葉がかけられました。その後、生徒たちは、会場での試合観戦、パブリックビューイングでの応援を通じてワールドカップを身近なものとして体験するとともに、トップチャレンジリーグ所属の近鉄ライナーズを訪れ、各国をルーツに持つ選手と交流しました。さらに東大阪市内の中学校を2校訪問し、ラグビーに加えて柔道、調理実習、書道体験、英語による日本文化の紹介等を受け、同世代の国境を越えた交流の輪を広げました。参加した生徒からは「また日本に来たい」「日本でラグビーがしたい」「日本の生徒はお互いを尊重しており、礼儀正しいと感じた」といったコメントが寄せられました。また、交流した東大阪市の中学生からは「この交流を通じ異なる国や文化に関心を持った」という回答が9割以上に達し、「国際交流がこんなにも楽しいと思っていなかった。次は自分が留学したい」「英語をもっと頑張ろうと思った」といった感想が寄せられました。

本交流事業は、派遣元である3か国の生徒のみならず、受入側である日本の生徒たちにも数多くのもを残してくれました。本交流を通じて得た経験がラグビーワールドカップのレガシーとして将来より大きな花を咲かせてくれることでしょう。



派遣事業での集合写真



派遣事業でのスピーチの様子



受入事業での交流の様子



受入事業での柔道による交流の様子

(2) アジア各国へのラグビー競技の普及

スポーツ庁では、「Sport for Tomorrow」(東京2020大会に向けて、開発途上国をはじめとする100カ国・1000万人以上を対象に、日本政府が推進するスポーツを通じた国際貢献事業)を通じて、アジア圏へのラグビー普及にも努めています。

平成27年から、独立行政法人日本スポーツ振興センター(以下、「JSC」という。)やJRFU等と連携し、アジア各国へのラグビーの指導者の派遣や講演会等を実施してきました。

平成30年12月には、大会開催都市である大分県及び公認チームキャンプ地である別府市と連携して、ラオスでラグビーをツールに共生社会の実現を促進する取組を実施しました。タグラグビーに関する講習会及びワークショップを開催し、実際に障害を持つ子供や大人を含めてタグラグビーを実施したことで、障害の有無にかかわらず互いを尊重し合うことへの啓発を行いました。その結果、日本が有する特別支援教育コンテンツとタグラグビーのノウハウの学びを通じて、今後の特別支援教育の発展を図っているラオスに対して新しいアイデアを提供しました。

また、令和元年7月には、日本からインドへラグビー元日本代表選手やウィルチェアーラグビー*¹指導者、スポーツとジェンダーの専門家を派遣し、普及活動を行いました。その一環として、全国大会に出場するチームの監督やコーチ、選手を対象としたラグビークリニックや競技用車いすを使ったウィルチェアーラグビー講習会、女性アスリートの環境改善や参画支援のためのジェンダーセミナーを実施しました。その結果、ラグビー特有の文化であるノーサイドやOne for all, All for oneの精神も共有され、ラグビーの価値や楽しさを伝えることができました。



ラオスでのタグラグビーによる障害者支援



インドでのラグビークリニック



インドでのラグビー講習会



インドでのジェンダーセミナー

*¹ ウィルチェアーラグビー：車いすラグビーとも呼ばれ、四肢に障害を持つ者が車いすで行う競技。2000年のシドニーパラリンピックから公式種目となっている。

3 地方自治体の取組

大会前、大会期間中を通じて、全国の大会会場、公認チームキャンプ地や事前キャンプ地などの場で、以下の例のような機運醸成や国際交流を図る各種の取組が行われました。

(1) 宮古市の取組

公認チームキャンプ地としてフィジー代表とナミビア代表を受け入れた宮古市は、大会の機運醸成を図る取組として、市内の小中学校においてタグラグビー教室を開催しました。その2か国に関する国際理解学習のために「学校給食ナミビアDay」、「学校給食フィジーDay」として両国出身者を招待し、両国の文化を学びながら国際理解を深めました。大会開催にあたっては、宮古市国際交流協会と協力して宮古市を訪れる外国人向けに通訳スタッフを配置し、おもてなしの体制を整えました。



タグラグビー教室



ナミビア代表と市民との交流



学校給食ナミビアDay



学校給食フィジーDay

(2) 磐田市の取組

公認チームキャンプ地として掛川市と合同でアイルランド代表、ロシア代表、オーストラリア代表を受け入れた磐田市は、大会の機運醸成を図る取組として、ラグビートップリーグに所属する地元チームであるヤマハ発動機ジュビロの選手たちが市内の小学校等を訪問し、子供たちにラグビーの楽しさを知ってもらうための体験活動を実施しました。また、大会期間中の市民と訪日外国人の交流に備えて、4か国語の挨拶をまとめた冊子を小学校に配布するとともに、ヤマハ発動機ジュビロの外国人選手との英会話授業や交流センターでの英会話教室を実施しました。大会期間中には、中心市街地でイベントを開催し、ビアガーデンや物産販売、忍者や武将との記念撮影等、訪日外国人と市民との交流を図るとともに、ラグビー体験会としてラインアウトやスクラム、パス交換等を通じて代表チームの選手と子供交流を実施しました。



オーストラリア代表と小学生とのラグビー交流



オーストラリア代表の英会話教室



50日前カウントダウン企画



観客へのおもてなし

(3) 別府市の取組

公認チームキャンプ地としてニュージーランド代表、カナダ代表、オーストラリア代表、ウェールズ代表、イングランド代表を受け入れた別府市は、大会の機運醸成を図る取組として、様々なイベントを開催するとともに、海外姉妹都市の高校生を別府市に招へいして国際交流のためのラグビーの試合を開催する等、市民がラグビーに触れるきっかけとなる機会を創出しました。大会期間中には、ニュージーランド代表と約3,000人の市民が参加した交流事業を実施しました。チーム受入れにあたり整備した、世界基準のグラウンドやウエイトトレーニング場は、大会後にスーパーラグビーに参戦するサンウルブスの合宿に使われるなど、その後も同市が行う持続的なチームの誘致に活用されています。



イングランド代表の練習の様子



ウェールズ代表の練習の様子



姉妹都市ラグビー交流



ニュージーランド代表との交流会

(4) 熊本県・熊本市の取組

大会会場となるとともに、公認チームキャンプ地としてはフランス代表、トンガ代表、ウェールズ代表、ウルグアイ代表を受け入れた熊本県・熊本市は、大会の機運醸成を図る取組として、大会開催までの節目となる2年前、1年前、100日前等でラグビー元日本代表選手等を招へいた体験イベントやパブリックビューイング等を実施し、ラグビーの魅力を発信しました。これらの情報発信は、地域住民に向けたものだけでなく、同じ九州の開催都市の福岡県・福岡市、大分県と合同で海外に向けても行われ、世界のラグビーファンが集うイベントである香港セブンズにおけるブースの出展、フランスで開催されたJapan Expoにおけるプロモーション活動が行われました。また、大会開催の2年前から医療救護や通訳、案内といった多様な役割を担うボランティアの育成を行い、受入体制の準備が進められました。なお熊本県は、RWC2019日本大会の約1か月後に開催された2019女子ハンドボール世界選手権大会の開催地にもなっており、このボランティア育成は広くスポーツボランティアとしての心構え等を身につけることで、両大会開催の支えとなりました。さらに大会前には、ウェールズ政府やラグビー協会が熊本市を訪れ、ラグビー教室を開催し、子供たちとの交流を図りました。大会中にはキャンプに訪れた各国代表チームとラグビー教室やファンゾーンといった場面での交流や日本文化体験が実施され、代表選手と触れ合う機会が創出されました。



大会1年前イベント



ウェールズ代表との交流



フランス代表のキャンプの様子



大会を支えたボランティア

第5節 大会のレガシー

1 ラグビーワールドカップ2019日本大会がもたらしたもの

(1) 大会開催地における地域活性化

文部科学省では、委託事業であるラグビーワールドカップ普及啓発事業により、大会の成功に向けてラグビーの普及・啓発に努めてきましたが、多くの大会開催地でも、ラグビーの普及・啓発に努めてきました。

大会開催地の一つである東大阪市は、高校ラグビーの聖地として知られる花園ラグビー場を有し、日本を代表するラグビーのまちとして知られています。開催地となるべく誘致した狙いとしては、ラグビー場の更なる活用や、世界とつながるための商機の掘り起こし、観光施策を体系化し推進体制を構築して賑わいのあるまちにすることの3つが挙げられていました。

まず、花園ラグビー場を大会開催基準を満たしたスタジアムにするため、大型ビジョンの設置や全座席のセパレート化、VIPルーム・ラウンジの整備、ラグビーミュージアムのリニューアル等の大規模な改修を行いました。加えて鉄道や道路の開通といった交通インフラの整備も行い、周辺都市や空港等への利便性が向上しました。

また、大会開催を契機として、多くの人を市内に呼び込むための観光施策の強化にも着手しました。これを着実に実施するための調整役として法人を設立し、商工会や飲食店、大学等の多様な関係者と協同し、明確なコンセプトに基づいた観光地域づくりを実現するための戦略を策定しました。東大阪市の周知のために市内で体験できるプログラムを中心に構成したPR動画の作成やSNSを通じた広告の配信等を行いました。

さらに、障害の有無や年齢、性別にかかわらず誰もがスポーツに親しむまちづくりを目指し、ウィルチェアスポーツを推進しています。特に、RWC2019日本大会の開催中に東京で開催され、多くの観客が観戦に訪れ、注目を集めることとなった車いすラグビーワールドチャレンジ2019に向け、東大阪市では、ウィルチェアスポーツのイベントの開催や出前講座を積極的に開催しました。

(2) 大会開催に伴う訪日外国人旅行者の増加

観光庁では、JNTO（日本政府観光局）において、RWC2019日本大会特設ウェブサイトを開設し、開催都市を中心とした日本各地の観光情報を発信したほか、大会前から海外メディアを招請し、各開催都市取材していただくための視察旅行（ファムトリップ）を実施する等、大会を契機として世界中に我が国の魅力が発信されるよう努めました。

RWC2019日本大会出場国からの訪日外国人旅行者数は、9月、10月の2か月間で対前年同期比29.4%増となっており、RWC2019日本大会観戦者を含め多くの外国人が来日しました。

また、全国各地が試合会場となっていたことから、地方での滞在も促進されました。

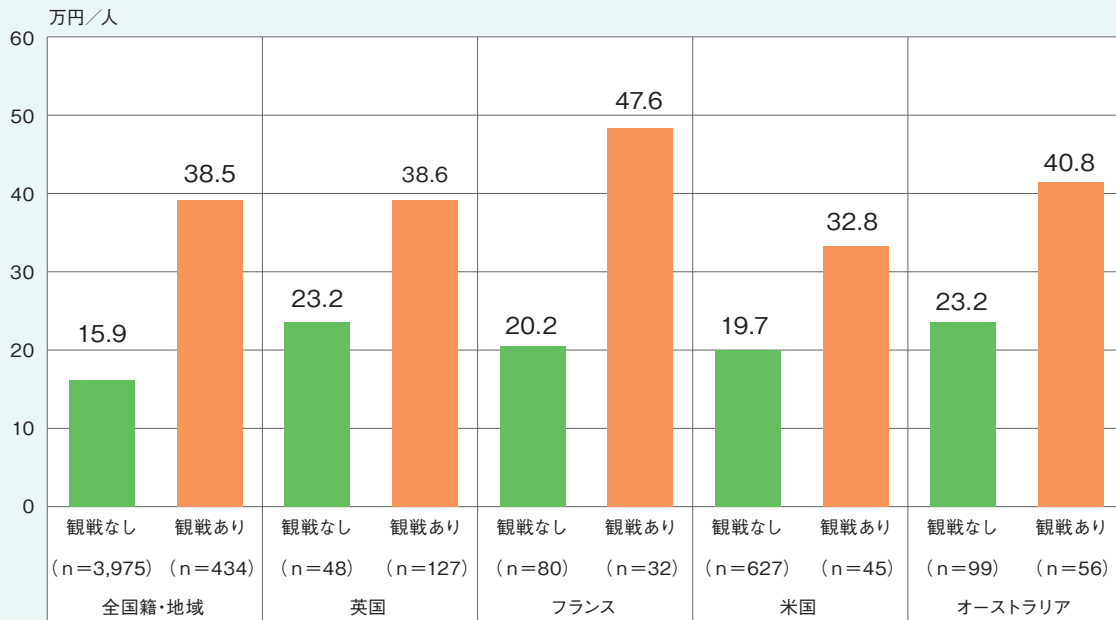
訪日外国人旅行者のうちRWC2019日本大会観戦者の1人当たり旅行支出は、38万5千円



写真：RWC2019 特設ウェブサイト

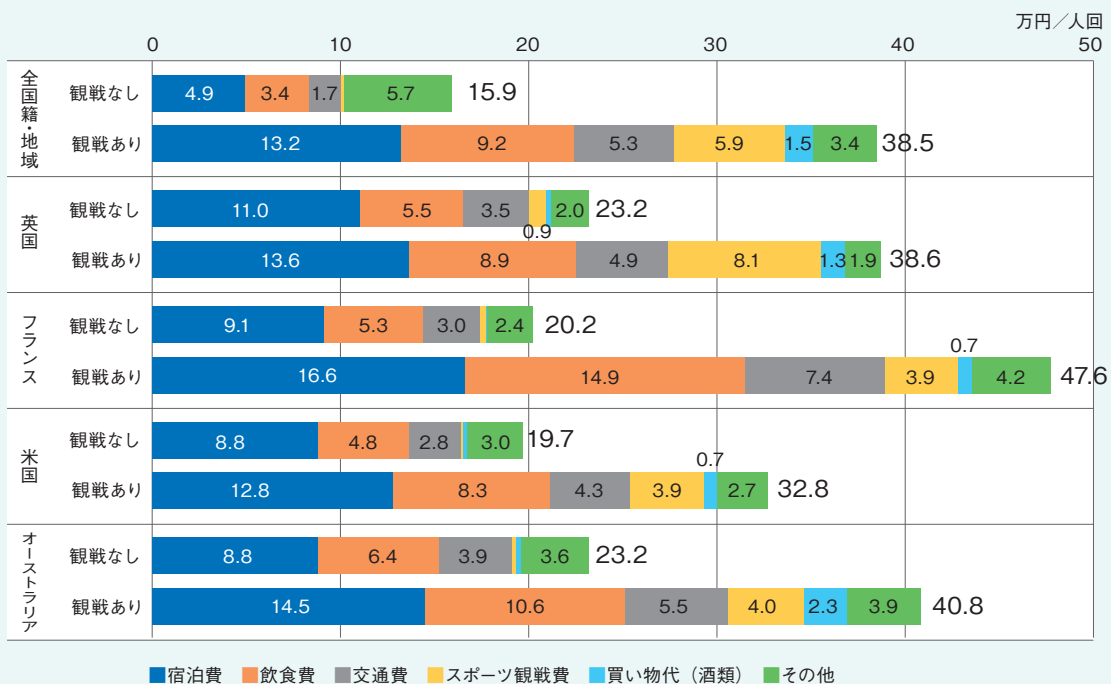
と試算され、観戦していない旅行者の15万9千円と比較して約2.4倍となりました。国籍別にみると、英国38万6千円、フランス47万6千円、米国32万8千円、オーストラリア40万8千円となり、いずれの国籍でも観戦していない同じ国籍の旅行者より高い額となりました。また、費目別にみると、スポーツ観戦費のほか、宿泊費や飲食費、酒類の購入費において、観戦していない人に比べて高い傾向がみられました。

図表 1-2-1 ラグビーワールドカップ観戦有無別にみる訪日旅行 1 人 1 回当たり旅行支出



注：nはサンプルサイズ。なお、ワールドカップ観戦者のサンプルサイズが30以上の国籍・地域のみ掲載している。
 (出典) 観光庁 調査 (令和元年12月18日公表)

図表 1-2-2 ラグビーワールドカップ観戦有無別にみる訪日旅行費目別 1 人 1 回当たり旅行支出



(出典) 観光庁 調査 (令和元年12月18日公表)

(3) 国際交流

RWC2019日本大会により、会場の内外で幅広い国際交流が進みました。力の限りを尽くした熱闘の後、ノーサイドの精神を体現して互いの健闘を讃えあう選手たちに対して、日本の観客は訪日観光客と一緒に、素晴らしいプレイには日本代表に限らず惜しめない声援を贈りました。このような会場からの応援に選手たちは日本式のお辞儀で応え、会場はさらなる一体感に包まれました。また、キャンプ地における国歌やハカでの歓迎など、ラグビーの精神の一つである「尊重」にも通じる相手の文化に対する敬意を込めた対応の様子は、海外にも広く伝わっています。

本大会では台風の影響で史上初めて試合が中止になりましたが、カナダ代表が被災地釜石で土砂や泥を撤去するボランティア活動を行うなど、ラグビー以外の部分でも感動と連帯が広がりました。さらに、本大会によって生み出された国際交流は、ボランティアをはじめ、訪日客を迎えた多くの人々との触れ合いとして、ラグビーを超えて大きく広がることとなりました。

(4) ラグビーの価値・スポーツの価値の発信

RWC2019日本大会では、日本代表に限らず、出場する全てのチームに対して熱烈的な応援が行われました。これは99.3%に達したチケット販売率にも表れています。日本代表が南アフリカ代表に敗れた後も盛り上がりは続き、決勝戦が行われた横浜国際総合競技場では、2002（平成14）年のFIFAワールドカップの際の記録を更新する70,103人の入場者数を記録しました。

今大会の盛り上がりについて、嶋津昭RWC組織委員会事務総長は、ラグビーのゲームの魅力とともに、選手の振る舞い等、ラグビーの持つ品位、情熱、結束、規律、尊重という5つの価値が日本人の心に響いたのではないかと分析しています。

2 今後のラグビー普及へ向けた取組

(1) ラグビー施設の整備

RWC2019日本大会の結果、ラグビーをはじめとしたスポーツに対する国民的関心が高まりました。この全国的な機運を今後のラグビー等の普及・振興に生かすことが重要ですが、全国のスポーツ施設におけるラグビー競技が実施可能な施設は限られている状況です。そのため、同大会のレガシーとして、全国の各都道府県・市町村が所有するスポーツ施設（公立社会体育施設）を対象とした「ラグビー競技が実施できるスポーツ施設の整備事業」を令和元年度補正予算（予算額20億円）に計上し、整備を進めています。整備内容は、①ラグビー場の新改築、②既存のラグビー場の改修、③既存の運動場等をラグビー場としても使用できるようにする改修であり、この予算を活用して整備した事業を「ラグビーワールドカップ2019日本大会記念事業」として位置付けています。本事業を実施することにより、子供や地域住民がラグビーを行う、もしくは接する機会を創出し、日本におけるラグビーの更なる発展に努めていきます。



施設整備が完成した際のイメージ



施設整備が完成した際のイメージ

(2) ラグビーの振興に関する関係者会議の開催

RWC2019日本大会は、国内外から延べ170万人を超える観客を動員するとともに、国民からの大声援を受け快進撃を続けた日本代表が初のベスト8進出を果たすなど、人々に大きな夢や感動を与える大会となりました。大会を契機に国民の間で高まったラグビー人気を定着させ、国際競技力強化も含め、日本のラグビーをさらに発展させるための方策を検討するため、令和元年12月23日に「ラグビーの振興に関する関係者会議」を開催しました。この会議はスポーツ庁、JSC、JRFU、RWC組織委員会により構成され、今後も関係者でラグビー発展に向けた議論を継続していくこととしています。

3 今後の国際競技大会の国内開催へ向けて

RWC2019日本大会を皮切りに様々な国際競技大会が国内で相次いで開催されており、令和3年には概ね30歳以上であれば誰でも参加できる生涯スポーツの国際総合競技大会であるワールドマスターズゲームズ2021関西や2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会^{*2}が開催される予定です。これらの今後開催される国際競技大会に対し今大会で得られた知見を運営面等に反映し、各大会の成功につながるよう、文部科学省・スポーツ庁として最大限の協力を行っていきます。

^{*2} 令和2年3月30日に、東京オリンピックは令和3年7月23日から8月8日に、東京パラリンピックは同年8月24日から9月5日に開催されることが決定されました。

ラグビーワールドカップのボランティアに参加して

十数年前、やんちゃで手を焼いていた小3の次男は「人を倒して褒められた」とラグビーを始めた。大学4年となった今も、そしてこれからも続けるという。母親としては「まだやるの?」と呆れつつ、ラグビーとの出会いに感謝は尽きない。

ラグビーは、不安定な楕円のボールを前に投げることなく前に運ぶという理不尽なミッションに、15人で挑む競技だ。重さ、高さ、スピード、キック力、器用さ、賢さ、真面目さなど個人の強みをかみ合わせ醸成させたチームが勝つ。One Teamという言葉が象徴するように、自分とは異なる個性なくしてチームは成り立たない。だから仲間をリスペクトし、仲間のために体を張る。必然的に仲が良い。2019日本代表はそんなラグビーの魅力を実現するチームだったと思う。

福島在住の私は、開催決定の瞬間から「釜石でボランティアをやるぞ」と決めていた。日本選手権七連覇の新日鉄釜石が存在したラグビータウンであり、東日本大震災で被災した町。この町の空気、海、山、そして人と、ラグビーを通じて繋がりがかった。

9月25日フィジーvsウルグアイ戦の日、私はボランティア控室の運営を担当した。マネージャーから言われた言葉は、「ボランティアが楽しまないと観客を楽しませることはできないから、まずは笑顔でいこう!」だった。本当にボランティアの意義や気持ちを理解していないと取れないスタンスだ。ここまでボランティアを信頼し、フラットで風通しの良い関係を運営側が築いてくれるとは思っていなかった。心から感謝と敬意を表したい!

スタジアムから湧き上がる歓声が白熱した試合を伝えてくれる。休憩に戻ってくるボランティアの高揚した笑顔、青い空に描かれたブルーインパルスの軌跡、大漁旗、全てが釜石を祝っているようだ。試合を見ることはかなわない、会場にすら入れない。それでもボランティアとしてこの大会に関われる幸せ。おそらくそこにいた全ての人が共有した清々しく晴れやかな空気を、私は何度も何度も胸に吸い込んだ。

そして10月13日ナミビアvsカナダ。もう一度あの夢のような時間をという望みは、台風に打ち砕かれた。土砂崩れが起こり、道路が分断され、避難所が開設される中で大会がやれるはずがない。頭では中止が正義とわかっている、心は簡単にコントロールできない。頑張ってきた釜石の人々の顔が浮かび、悔しくて悲しくてやるせなかった。

雨上がりの町に出てみると、多くの市民が泥かきを始めている。そこになんとカナダチームの選手たちが何事もなかったかのように参加しているではないか。私はいつまでも中止を引きずっている自分を恥じた。厳しい局面であればこそ、仲間と力を合わせ、声を掛け合い、冗談を言って笑い、乗り越える。ケガをしても腐らず、時を待ってまた立ち上がる。ラグーマンたちは太腕で楽々と泥を運んでいた。ああ、やっぱりここまで来てよかった。晴れた日も、たとえ台風の日でも、釜石にはやはりラグビーがよく似合う。そして私はやはりラグビーが好きだ。ボランティアとして関わられたことに心から感謝しよう。

(執筆：NPO法人うつくしまスポーツルーターズ事務局長 齋藤 道子)



